

対立と融和

『現代宗教 2016』編集委員会

宗教にまつわる紛争や対立に注目が集まるようになってしばらく経つ。あまりにショッキングな暴力の数々。その模様は音声となり映像となって情報空間をかけめぐる。そこに映し出されているのは、宗教が本質的に破壊的であることの証左なのだろうか。宗教は、愛や赦し、慈悲や慈善を説きすすめてきたはずなのに、一体どうということなのか。

この問いに答えるには、逆説的なようだが、次の問いに向き合ってみなければならぬ——はたしてこれは「宗教の問題」なのか。宗教に焦点を合わせすぎると、かえって問題を把握しそこなうのではないだろうか。幸いなことに、この点については最近ようやく、より冷静な見方がなされるようになってきた。すなわち、現代世界が巻き込まれている「宗教にまつわる紛争や対立」が、政治や経済、教育やメディアなどの要因により、決定的に形作られていることが、あらためて強調されるようになったのである。

実際、こうした紛争や対立は、宗教と世俗的なもの（科学、自由民主主義、資本制、国民国家、権力政治など）とが混じりあう場所で生じている。世俗的なものが領導する近代の文明と権力が、この問題に直接の責任をもつ。宗教が責任逃れをしてはならないと同様に、世俗的なものは宗教に責任を押しつけてすませるわけにはいかない。この問題は、世俗的近代が発展してきた歴史的経緯の意図せざる帰結として、その内側から生じているからだ。

このように、「宗教にまつわる紛争や対立」については、文明論的なレベルからの再検討を要する。その課題はやっと自覚されはじめたところで、広い合意のある安定した知識がえられるには程遠い。したがって本特集の第一の方針は、まずはその面でのたしか知識がなにかを模索してみることである。これらの紛争・対立・暴力の原因なり背景なりを、宗教との関わりにおいて整理しなおしてみようということだ。

そして第二の方針は、この暴力的状況から抜け出る道を指し示したいということである。世俗的なものが独自に発展していくことで、恒久的な平和と繁栄が達成されるだろう——近代とはそうしたビジョンを追い求めてきた時代である。そこでは、物質的な豊かさとならんで、倫理や良心、合意や共存についての関心と方策が、幾多の失敗をかさねることで、豊かにはぐくまれてきた。現代世界にとって、こうした世俗的近代性がひとつの指針であり希望であることに変わりはない。「宗教にまつわる暴力」がかくも凄惨に荒れくるう場所から抜け出す道は、したがって、その理想に再帰しつづけることなのかもしれない。

他方、現代世界において宗教を引き受けようとする個人や集団には、どのような道がありうるだろうか。古来の文化と伝統を受け継ぎ、霊的な実在への信念に導かれて人生をおくる人たち。彼らには、暴力の渦をぬける道を、独自にしめすことができないものだろうか。こうした問いは、現代宗教という表題をもつ本誌であればこそ、考究してみることができるだろう。

(文責 近藤光博)